

近年のデフレ予想について

長崎 健一

はじめに

本稿では、近年のデフレーションをめぐる議論とデフレ予想の重要性について述べ、さらに、最近(直近)の、日本の消費者の予想物価上昇率の計測データを示す。

1. 近年のデフレ議論とデフレ予想の重要性

筆者はこれまで、インフレーション関連の分析を行なってきたので、それらの分析も参考になるかも知れないが、本稿では、もっぱら清水谷の分析・説明に基づいて述べる。

デフレ予想があれば、経済に悪影響が出るほか、主体間の実質的な所得転移が進む。また、現実の物価上昇率にも影響が出る。

物価予想形成メカニズムについては、海外では多くの実証分析がなされているものの、日本では、あまり十分な分析は行なわれてこなかったという。

物価予想は何によって決定されるのか。予想物価上昇率の決定要因には、適合的予想(足元の物価上昇率)、予想の慣性(過去の予想物価上昇率)、所得要因、外生的要因(世界的な事件の発生等)、金融政策などがある。清水谷らの研究では、予想物価上昇率の変化の一部は、適合的予想や予想の慣性で説明できるという。

物価上昇率にインパクトを与える経路は多様だが、外生的ショックで大きな影響を受けることが示唆される。

最後に、金融政策についての清水谷の考え。

金融政策は、政策変更を知っているだけでは、予想物価上昇率は変化しない。したがって、金融政策でデフレ予想を反転させようとするのならば、多くの家計に働きかけて、家計が理解し予想を修正するように、大胆・わかりやすい形で行なうことが重要であろう。

2. 予想物価上昇率の計測結果

本節では、最近の日本の消費者の予想物価上昇率の計測結果を示す。

計測は、Hodrick-Prescottフィルタによる。これ以外の計測方法も存在するが、各種計測方法の詳細は、筆者のこれまでの稿を参照されたい。

本稿で予想物価上昇率計測のために使用した物価は、消費者物価である。

データは、月次データである。計測期間は、1992年1月～2010年6月である。物価上昇率は、前年比%である。

パラメータ λ には、 $\lambda=100$, $\lambda=1000$, $\lambda=10000$, $\lambda=14400$, $\lambda=20000$, $\lambda=100000$, $\lambda=150000$ の7種類の値を使用した。

計測された予想物価上昇率を、図2-1～図2-7に示す。これらの図では、実線が予想物価上昇率である。点線は現実の物価上昇率である。

図からわかるように、直近ではデフレ予想が観察される。

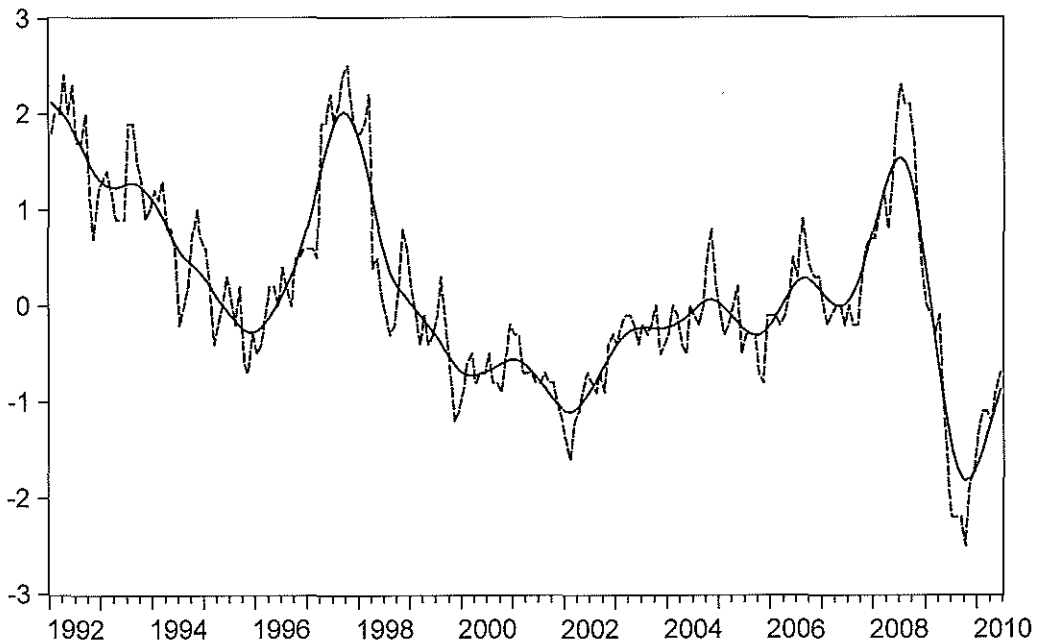


図2-1 予想物価上昇率($\lambda=100$)

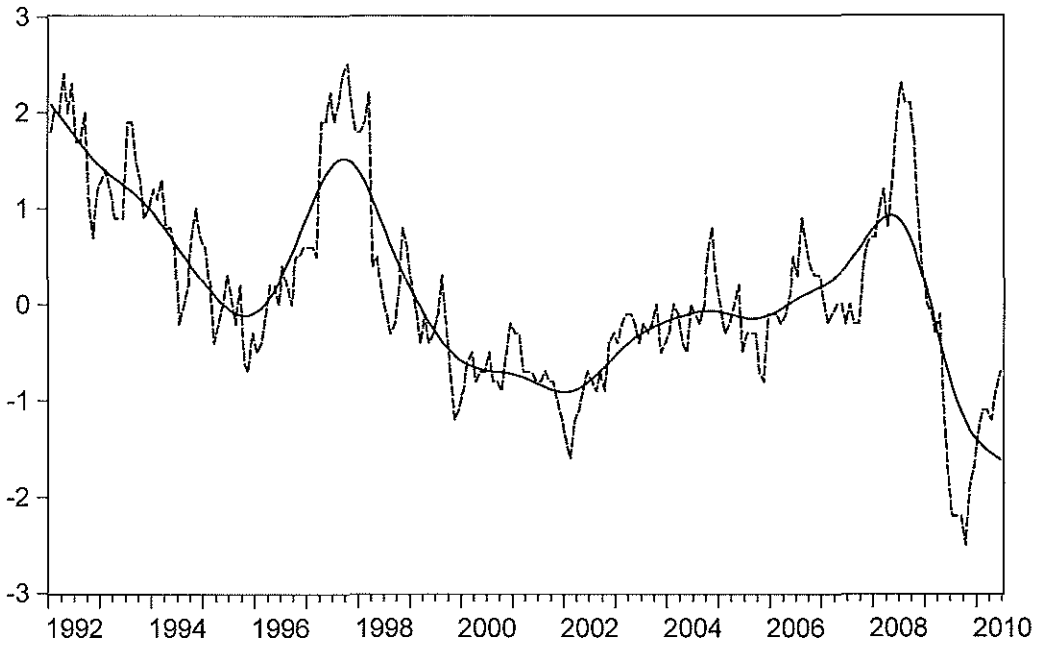


図2-2 予想物価上昇率($\lambda = 1000$)

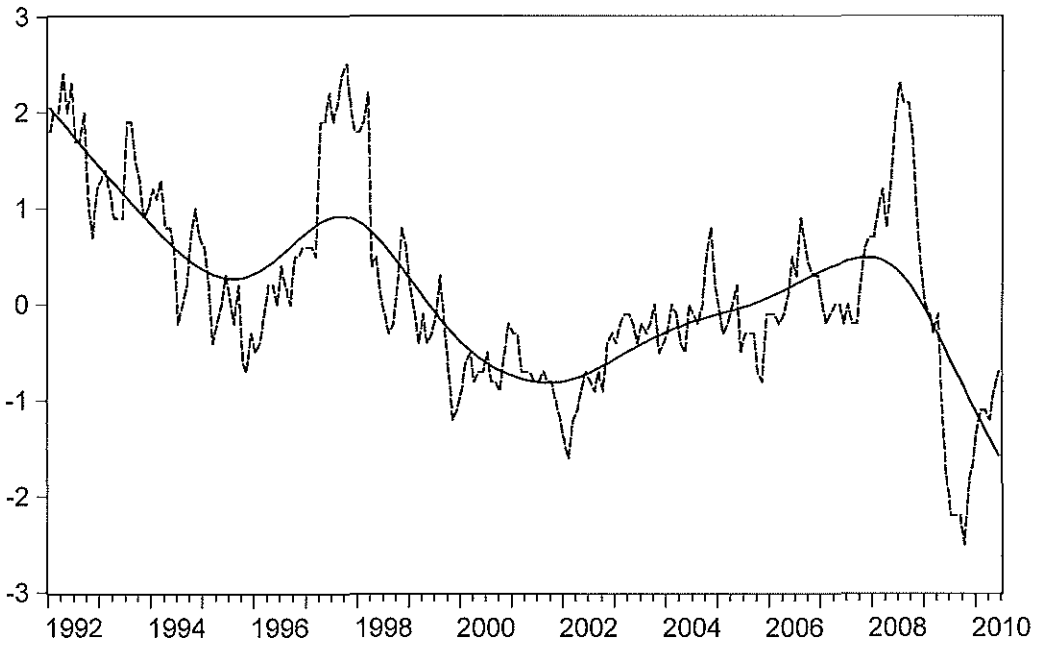


図2-3 予想物価上昇率($\lambda = 10000$)

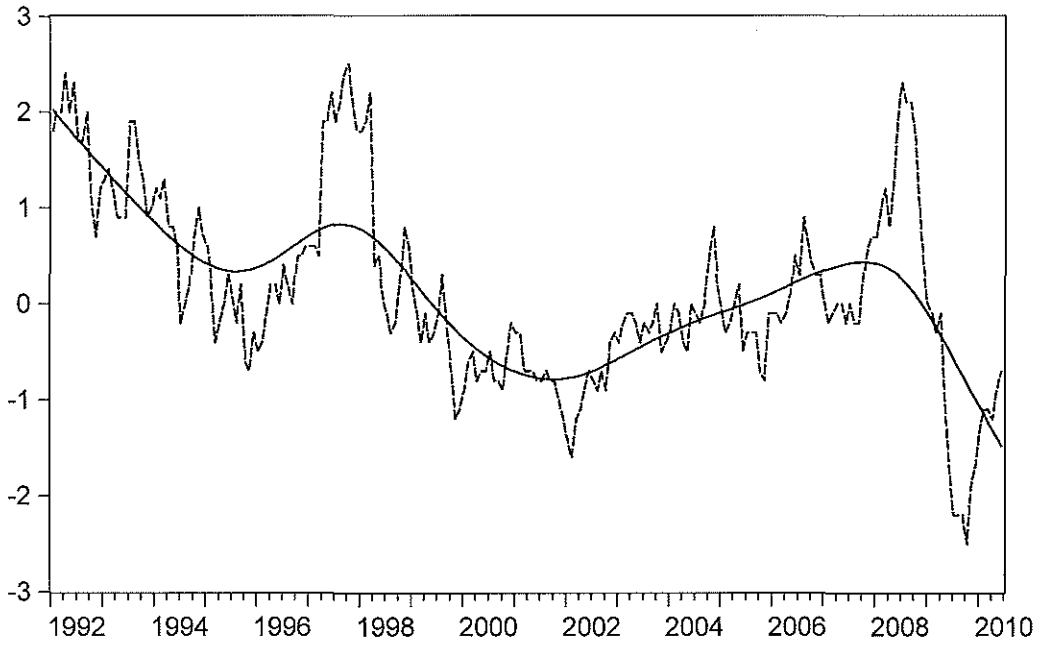


図2-4 予想物価上昇率($\lambda = 14400$)

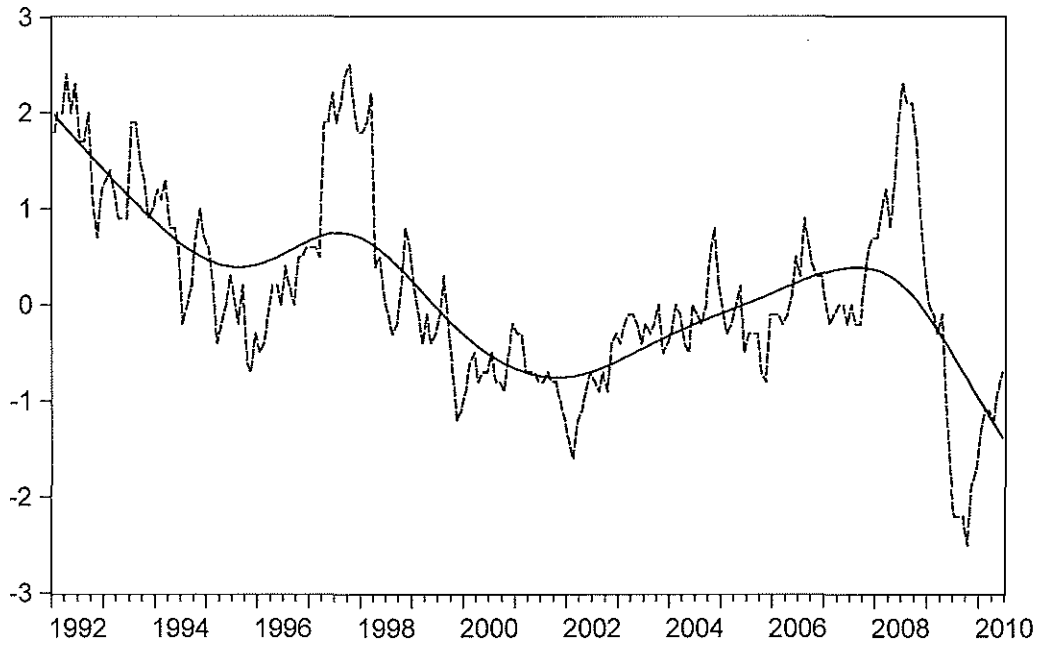


図2-5 予想物価上昇率($\lambda = 20000$)

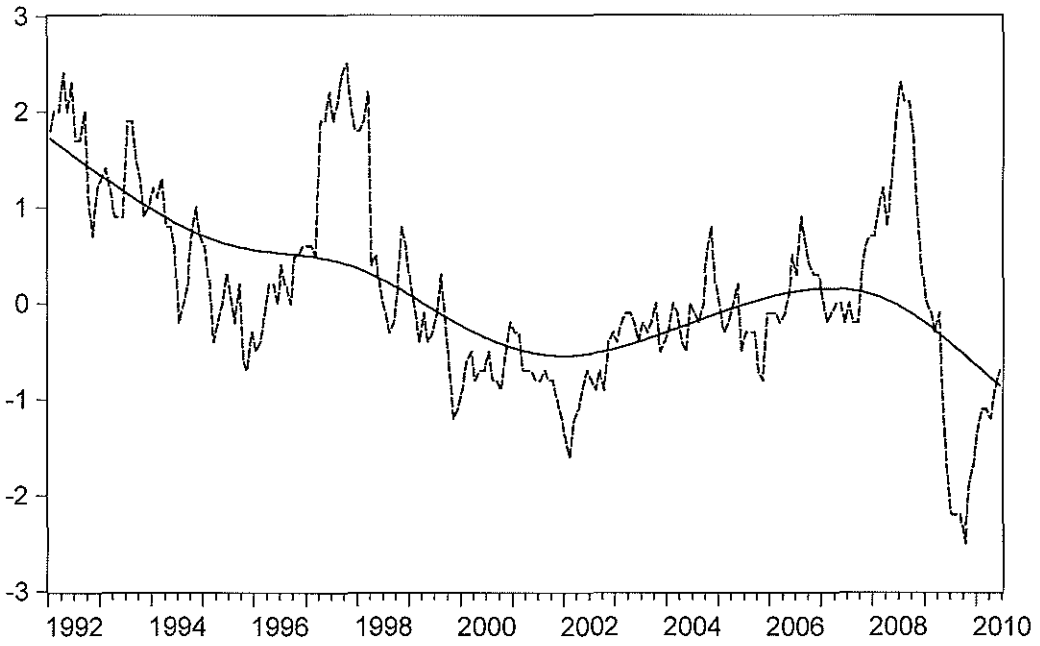


図2-6 予想物価上昇率 ($\lambda = 100000$)

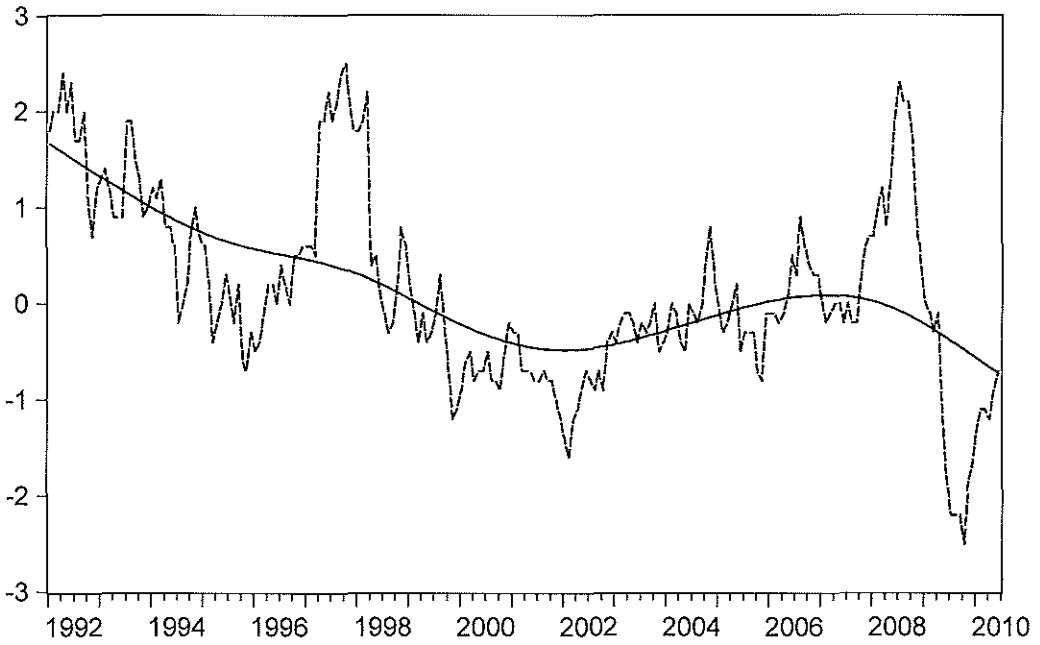


図2-7 予想物価上昇率 ($\lambda = 150000$)

参考文献・参考サイト

清水谷 諭. 「急がれる「物価期待」の研究:デフレ脱却に不可欠」, 『日本経済新聞』「経済教室」,
2010年3月24日.

(RIETI~独立行政法人:経済産業研究所~ のWebサイトでも参照可能)